

ふらりと霞ヶ浦を中心とした周辺地域の歴史文化の再発見と創造を考える

別冊ふるさと風

10周年記念号 (2016年6月)

確りとも言う会に

白井啓治

・ぐるっと見渡せばふるさとの風と景

この「ふるさと風」も十周年を迎える事が出来た。ふるさとの歴史・文化の再発見と創造を考える、を軸にして、少人数ではあるがそれぞれが確りと物を言える会報でありたいと進めて来た一つの自慢できる結果であろうと思う。

水にしる風にしる時にしる流れるものには景がある。景とは姿と置き換えてもいいだろう。歴史というのも時という流れの景であり、伝統というのはその一つの姿であると言える。その姿は真実と置き換えてもいいだろう。

時の流れの中で一つの確りとした景としての姿をなしたものが伝統という文化であろう。伝統という文化は、一つの芸術と言っていいだろう。

しかし、伝統が必ずしも芸術の域まで高まることは稀である。そして、芸術の域にまで達しなかった伝統は、時の流れに洗われて消滅してしまう。特にノスタルジーを伝統と錯覚して呼んでいるものは、その大半が、いや殆どが存在の色を失い消滅してしまう。

最近、面白い記事を読んだ。演歌は日本の心か、と題するものであったが、どの論者も演歌を伝統

と呼ぶことには難色を示していたのだが、歴史の里いしおか、の歴史自慢にも大いに通じるものがあり、興味深く読んだ。

「演歌」というジャンルの呼称が生まれたのは、1960年代後半の事で、1970年の現代用語の基礎知識に初めて取り上げられたのだそうだ。このように見ていくと、「演歌」を伝統と呼ぶにはあまりにも怪しげではある。

小生の子供の頃は、単に流行歌と呼んでいた記憶がある。演歌というと小生などは直ぐに演歌師という言葉の思い起こす。演歌師の事は子供の頃に、よく父親から話を聞いており、浅草の街角などでバイオリンを弾きながらのんき節などを唄い演じていたという。

今の演歌というのは、たしか五木寛之の「演歌の竜」と言う小説が発表され、一気に広がっていったように記憶する。さらに、寺山修司などの暗さや寂しさにこそ庶民性がある等の主張が、演歌というジャンルを後押ししたようである。

そういう意味では、演歌と呼ばれるジャンルが一世を風靡したのは、60年代後半から、ニューミュージックが出て来て、そして90年代になってJポップなどが現れて来るまでのわずか20年ほどであるから、演歌は日本の伝統というには、間違いではないが些か問題ありと言えるだろう。

個人的には、カラオケなどで演歌を歌うのは好きであるが、好きだからと言って演歌が日本の伝統音楽というには些か抵抗はある。

このように見てきたとき、我が石岡の歴史認識にも大いに首を傾げたくなることが多いように思う。しかし、それを言うのと猛反発を受けたりもするが、それを誰も言わなくなったのでは、それこそ重大問題である。

当会報2014年7月号に、宥書房・常総の歴史の編集・発行人であった故太田尚一氏から、「総社宮祭礼と市民の矜持」と題した投稿を頂き、掲載した。

そこでは石岡のお祭りに関する検証が述べられていたが、その中で祭りの歴史認識について「：系図屋の作成する当家の先祖は源平藤橘に発する、に似ている」と断じられていた。

この論評に市民からの反論を期待したが全く音沙汰がなかった。

太田氏のこの論評に対し、別冊100号記念誌に、美浦村の元村長で劇団宙の会を主宰する市川紀行氏より「：偽りの権威に寄りかかれれば、単なる見世物に随し衰退するだけである。市民の感性と潜在するエネルギーこそ新たな展開を切り開くだろう」とのコメントが寄せられたが、石岡市民の中から太田氏に反論する論者が無かったのは些か淋しく思うのは、小生だけではないだろうと思う。

8万人に満たない小市で、実際にはどうか分らないが、祭りの期間中40万人もの見物客が集まるというのは、自慢に値するものであろう。

しかし、時の流れに洗われ、新陳代謝しながら文化としての芸術的姿が確立されて行かなければ、

人口の減少に伴って遠からず衰退していくことは言うまでもないことである。

脚本・演出家としての目から見た時、幌獅子という独特の形態がありながら、その大獅子に芸能としての獅子の舞が見られないのは不思議な気がする。大きく重い獅子頭を息を切らして振り回してみても伝統芸能としての文化の姿にはならない。歴史のまち石岡をヨイショ、自慢して行くためには、天孫降臨のような物語だけではなく、歴史の景としての真実の姿を、検証しながら積み上げていくことが必要であろう。

十年の節目に、小生の思い出すのは、兼平智恵子さんが石岡の歴史を書いた際に、故太田尚一さんから「歴史を紹介する人が間違いを書いてはいけません」と指摘されたこと、打田昇三さんが自らの検証による歴史の嘘「虚構と真実の谷間」そして「私本・平家物語」を書き上げたことである。

この先何年という期待は不問とするが、この会報が続く限りは、確りと物言う会報であってほしいと願うものである。

ふるさと風の会とつば座の歩み(概略)

2004年。

6月、ふるさとおこし事業として、ふるさとルネサンス塾の「民話ルネサンス講座」がスタート。同年9月「劇団しゅわーど俳優塾」がスタート。2005年。

1月、民話ルネサンス塾一期生が中心となって、親睦会ふるさとルネサンスの会が発足。劇団しゅ

わーどへの「ふるさと物語の執筆提供」が始まる。9月、民話塾一期生の作品展を開く。

この年は、ふるさとルネサンスの会及び劇団しゅわーどの活動が、NHKテレビ、朝日・読売・茨城・常陽新聞、常陽リビング、石岡市報、その他タウン誌などに取り上げられる。

2006年。

6月、ふるさとルネサンスの会を単なる親睦会から一歩進めて、「ふるさとの歴史・文化の再発見と創造を考える」を基軸とした会報「ふるさとルネサンス」を発行することとなる。

8月、NHK水戸放送局のギャラリィで、歴史の里「いしおか」ふるさとルネサンス展(10日間)が開かれる。

11月、つくば市の劇場「カピオ」で劇団しゅわーどが朗読劇「石岡物語」を公演。

12月、脚本・演出家の白井啓治と女優小林幸枝が劇団「ことば座」を立ち上げ、ギター文化馆を発信基地として「常世の国の恋物語百」に挑戦することとなり、そのプレ公演を行う。

2007年。

3月、ふるさとおこし事業「ふるさとルネサンス」が頓挫し、事実上の活動停止となったことから「ふるさとルネサンスの会」を「ふるさと風の会」と改称し、会報も「ふるさと風」と改名。ギター文化馆でのことば座公演に、4月より「風のことば絵」作家兼平ちえこが参加し、舞台背景画として「常世の国の五百相」への挑戦が始まる。

2008年。

6月、会報「ふるさと風」創刊2周年記念展を、ギター文化馆で開催。

2009年。

10月、ふるさと風の会及びことば座の合同3周年記念展&公演を開催。

2010年。

6月、「ことば座定期公演」に合わせて、「風の会展」を開催。

2011年。

6月、「ことば座定期公演」に合わせて、「ふるさと風の会」5周年記念展&座談会を開催。

2012年。

6月、「ことば座定期公演」に合わせて、「ふるさと風の会」6周年記念展を開催。

6月21日、NHK水戸放送局・ニュースワイド茨城で、新たな舞台表現「朗読手話舞」が紹介される。

2013年。

6月、「ことば座定期公演」に合わせて、「ふるさと風の会」7周年記念展及び記念トーク会を開催。また、7周年記念して、ことば座公演でふるさと伝承民話である「鈴ヶ池の片目の魚」を復活再生させた「新鈴ヶ池物語」を朗読。

また、風の会の分科会「風のことば絵」サークルの発表会を同時開催。

11月、ことば座東京公演が、両国シアターXでヨネヤマママコさんの共演を得て行われる。

2014年。

5月、札幌・「北の未来をつむぐ」のイベントで、小林幸枝の手話舞が「音楽と語り、つむぎびと」の演ずる「かがり舟」に招かれ共演。

6月、「ことば座定期公演」に合わせて、「ふるさと風の会」8周年記念展を開催。

9月、会報「ふるさと風」100号祭をみんなの広場2Fで開催。会報・別冊100号記念を

発行。

2015年。

4月、東京立川市のイベントハウス・ラララにてことば座・手話舞公演。

5月、縄文の会にて市川紀行氏の講演の前座として手話舞のデモンストレーション。

6月、「ことば座定期公演」に合わせて、「ふるさと風の会」9周年記念展を開催。

2016年。

6月、ふるさと風の会およびことば座10周年記念祭を開催。

ふるさと風・10周年120号への応援歌

志には香気が漂う

吉野公喜

「ふるさと『風』」、10周年記念120号の刊行に快哉を叫びたい。驚きを禁じ得ない、大きな喜びである。正直すごいことに思える。

ふるさと『風』には、まさに薫風が宿る。

毎号、毎号深く読ませていただくとき、ふるさと『風』には「地域文化」、「ことば文化」への秘めたる警鐘、そして「異なるもの」、「弱さを内包するもの」へのことのほかやさしいまなざしが感じとれる。

白井啓治主筆を始めとする志豊かな執筆陣の言葉（ことば）には、善き人の魂の香気が漂っている。うれしきかな、ふるさと『風』の会。

ふるさと『風』の読者がますます増えることを切に望んで、120号の刊行を祝したい。

一ノ瀬綾さんからのお言葉（聞き書き打田昇三）

二〇一四年九月に出した「二〇〇〇号記念号」に「ふるさと『風』のご縁に想う」の玉稿を頂いた作家一ノ瀬綾さんに、今回も凶々しくご寄稿をお願いしたのでしたが、現在、ご多用の上に、少し体調を崩しておられるご様子で、五月二日にお電話で十周年記念の御祝いと励ましのお言葉を頂戴いたしました。有難くお礼を申し上げますと共に、一日も早くお元気を回復されて、御郷里にて益々ご発展ご活躍されることをお祈りする次第でございます。

古郷やよるもさはるも茨（はら）の花 一茶

ふるさと『風』十周年を祝う 市川 紀行

「それなりの美味いものと恋するおなごがいれば、名譽も金も何にも要らない」。蜥蜴や雀の話の中に唐突に「恋するおなご」が出てくるのが畏友白井ひろじのひろじたるゆえんである。年をとった証なのかと最近の蜥蜴やすずめや雑草や野の花やわんこにやんこの日常描写に表面的には頷きにつこりするのでも可能であるが、いやいや白井ひろじの情念は燃えて静まり静まっては燃えている。

60年安保から70年安保にかけて学生時代を持った世代のやるせなくも真情一途の消せない思いがあるからだ。時は過ぎ年月は憂いの色を帯びても目を閉じれば思いの数々が赤くあざやかに浮かび焦燥にも似た「青春」が燃える。「青春」とは二十歳の謂いだけではない。新しいポエジー、新

しい表出を生み出す憧憬に似た無償の、そして未だ果たされない約束すべてである。傷ついた心で階段を昇る。支えてくれる手を無残に振り払った日々。倒れそうに引きずる身を小さな肩に救われた日々。喧噪の都の石畳に快活な笑いが響き、ビルに区切られた四角い青空が微笑のように光っていた日々。自意識のまといつくファルス、悲劇めくひとり芝居、はたまた群衆のミュージカル、ステージの大道具揺れ落ち照明が落ち、ワルツは続いている。幕が上がリ幕が下り、それでも人生というやつがまとわりつく。静まるスタジオ、笑う女、暮れる港に水脈引く出船。そして明日がやってくる。朝焼けの雲に希望を吸い込み夕夕べの追憶に似た茜に零落の旅を思う。仕事をするので、今こそ。働くのだ。そうして暗がりの机でコーヒーを飲む。思えばいつもそこには森の泉がたゆまなく湧き広がっていた。ああ、俺に何が飲めただろう。街々から遠く離れて。針えんじゅの梢を鳴らすのは透き通る風ばかり。夜と日をかけてなっていた鐘の音も消えた。抗いと孤立と友の在りし日々、貧しく無名の豊かなる「我らが青春」。なげなしの金を払うパーラーの贈り物。恋するおみなごよ、君は輝いていた。そしていつまでも……。

霞ヶ浦の対岸、筑波山に近く「歴史のまち・石岡」に畏友白井ひろじがいる。なんとうれしく稀有の存在であろう。年代をほぼ同じくする才能あふれる詩人演出家がいるのだ。初めて巡り合った時から気脈が通じた。信頼した。思いに共感した。ただただ「歴史のまち」を標榜するだけの疲弊蒼然たる地に創造する新しい文化の風を生み出そうと挑戦を始めていた。都を去って十年、地域の可能性にかけるその思いにとつて旧来のまちと人々

の壁は厚かった。ひとり去り二人去りつまずきの石が行く手に広がる。さあれ、我は進むのみ。青春の息遣い胸にあれば失うものは何もないのだ。「ふるさと風の会」はこうしてスタートを切った。毎月「七人の侍」が思いのたけを表出する。そしてさらに10年、厳しいところさしの持続こそ我らが世代である。白井ひろじの情念である。「七人の侍」は今や十人余の侍になっている。(女性巴御前方々を侍にしまった。お許しあれ)。

併せて特筆すべきは詩人演出家、白井ひろじの本領を語る「ことば座」手話舞である。これも見事に10周年を迎えた。豊唾の手話を芸術の高みに昇華させた手話舞の創出は古今白井ひろじが初である。豊唾者小林幸枝嬢の才能と感性の発見は白井ひろじの才能と感性、そしてプロのキャリアがもたらした宝物である。舞姫幸枝嬢が長い訓練と困難な試行を通して織り出す手話舞の綴りは、私たちをえも言えぬ非日常の世界にいざなってくれる。二人のアートの見事な結晶、物語る白井ひろじはまさに「青春」のなかにいる。そうだとすればかけがえのない舞姫こそ「恋するおなご」の存在といえよう。幸枝嬢個体と同一化した舞姫のありようこそ「恋するおなご」にふさわしい。都の荒っぽい混迷の中で夢を食らって過ぎた年月もその後重ねた浪費のように見える年月も「静まり燃える」情熱のいぶきを優劣させない。人が生きるゆえんの泉なのだ。あの針えんじゆの木陰の泉で「俺は何を飲んだのか」。そう、憧れる「恋するおなご」という詩の泉を飲んだのであった。

ふるさとからの文化創出を独自に決意した「常世の国の恋物語100」も36話である。「歴史のまち」が放ってきた地域のほんとうの民俗言説を

拾って10年、文学に仕上げ、多くが朗読手話舞として舞台化された。物語にちりばめられる韻律の響き、ロマンに満ちた言葉の数々。「歴史のまち」というならこれを、そして白井ひろじの活動を何故に評価しないのだろう。力量と文化水準のなせるわざかと惜しまれてならない。「恋物語100」はまだまだ完成に遠い。「恋するおなご」、ミューズの泉は枯れない。「風」ともども「静まり燃える」情熱の篝火に「十人の侍」の熱風を吹き込んでほしいと祈るばかりである

私も政治的思考の立場として畏友白井ひろじと同様である。少年の日から戦後の同世代を過ごしたものと現政権の憲法を軽んじ戦後を否定したあたかも戦前復帰を目指すような傍若無人、言論思想の自由を奪う反動と数の暴力に我慢がならない。70歳をはるかに超えた自分の今後を思うと、いま私たちが声を強めなければ孫たちの時代が危ないといくつか運動に駆け出しているところだ。私たちに権力も武器もない。言論と選挙で戦うしかない。あの犠牲と加害を生んだ戦争はなんだったのか。戦後71年、アメリカオバマ大統領が広島を訪問した。白井「風」のブログに賛同する。

——「(前略)中には原爆投下に対する謝罪がない・等々の解説があったりもしたが、どうも原点を見失った主張に過ぎるように思えてならない。(中略)謝罪を国民に大にして言わねばならないのは時の日本の為政者たちなのである。だからこそ、戦争を問題解決の手法と考える愚かな為政者を規制する戦争放棄の憲法の意義を、この時にきびしく論ずることがオバマ広島訪問の大きな意義と思うのだ。(後略)」

少し硬くなったが記念の10周年誌発行である。時代を映す「風」のありかとしてお許し願えるだろう。主催者はじめ打田氏、菅原氏、木村氏らも古希を超えられてなお驚くほどの博識と健筆である。かかる痛快な「傍若無人」は読者の背中を押し、勇気を与える。知識の力を教えてくれる。頑強な体力保持のたまものであるに違いない。(女性陣の年には触れない)。

5月の半ば、私も自分の体力の具合を試そうとサイクリングに挑戦した。スポーツはなんでもするほうで特に中学の時は県南地区の名三墨手を通った。土浦一高で野球をやっていたら(哀れなもしもだが)あとにも先にも一回きりの甲子園出場であった。

長いこと親しんだ筑波鉄道が廃止されサイクリング専用の「りんりんロード」になって久しい。一度走ってみたいと思いついて果たせないうちに来た。「後期高齢者」とふざけた名前と呼ばれるようになったいま、平坦なりんりんロードなんか征服してやろうと意気込んだのである。自転車は孫の切り替えギア付きを借りた。少し若い友人と殺風景ではつまらないからと妙齢の女性に入ってもらった。白井ひろじのいう「恋するおなご」である。土浦駅から筑波山麓駅まで20キロ、往復40キロ。さわやかなさつき晴れと山の緑、早苗田の水に映る青空。吹く風さえサイクリングにふさわしいと快調に漕いだ。友人と「恋するおなご」は前に後ろに気遣いを見せてくれた。慣れてくると私が先頭に立ち余裕であった。

筑波山麓駅に着いた。大汗をぬぐい彼女が差し入れのオレンジを含みながら見上げる筑波山は、

あの尖った姿でなく優しい緑の森であった。帰途も小田城址までは順調に思えた。そこから先はそれぞれペースでのんびり行こうとなった。私はしばしば止まって水を飲んだ。飲まざるを得なかった。膝に来ないように、尻に来ないようにと。

「恋するおなご」は「ゆっくり、お先に」と走り出した。弱みは見せられない。「おう、大丈夫だ」と鷹揚に構えた。50メートル、100メートルと離れてゆく。また水を飲む。二人は並ぶように走っていて1キロ先だ。そして米粒のように直線の中に消えてしまった。向かい風がひどくこたえる。私は完全に置いてけぼりだ。「おい、一度くらい私を振り返れ」と叫んでみる。それから4キロは一人で奮闘した。屋根つきの休憩所で二人が休んでいた。帽子をとり「恋するおなご」は髪をなびかせ「艶然」と笑っていた。ほっとすると同時に腹が立った。「なんだ、俺を置いて行って」。私は止まらずにペダルに力を入れた。「恋するおなご」に八つ当たりする自分が笑えた。「一度くらい振り返れ、まったくもう」。あちらは休憩所で待っていたのに。さあれ、40キロの走破は何とか成功した。翌日も体の痛みは何もなかった。後日改めて「恋するおなご」に礼をいった。きれいな優しい笑顔をかえしてくれた。

体力まあまあ十分だ。もう少し人生頑張れそうである。畏友白井ひろじとともに。

(いちかわ のりゆき 劇団宙の会主宰 元美浦村長)



花さき山を臨む

札幌つむぎひと 熊谷敬子

咲いている花を見て思う

この花を咲かせているものは
何なんだろうかと

絵本「花さき山」の作者芥藤隆介のあとがき冒頭の言葉です。

生きることを花に尋ね山に問う作家の目には、生きているものを優劣で分け隔てしていないフアインダーがはめられています。里山の美しい風と光の景色と万葉の歳月を暮らす常世の国なら花さき山もきつと、何処か深いところで、在るのではないだろうか。

ことば座の公演でギター文化館を訪れて三年目の今回はこの花さき山をご披露したいと思います。ふるさと風の会とことば座十年の歩みに思いを馳せて、はなむけのことばを作品の中に重ねてちりばめられます。

お話の中で、登場するやまんばが山に迷い込んだ少女あやに花咲くその山の訳を説きます。

悲喜こもごもの人生の路傍に咲く花は、世間にはわざわざと知らしめないことが大概です。人知れずただ、そこに在るといふけなげさの開花を作者は讃えています。

情報の氾濫する今では、自己主張と表現がその軸を失っているように思えます。

誰しもが生まれながらに持っている命そのもののまっすぐな、人のために自分を生かしたいといふけなげさ。

そこに咲くやさしさの花とは、孤独という土でこそ根をしっかりと深く伸ばす。

人に褒め称えられることも、認められ報われることも望まぬことに光を当て、しかも感傷には浸らないやまんばの毅然と言いつ切ることは、少女あやの今後の人生の礎となる事を読者は暗に想像するでしょう。

これでいいんだと、自分の辛苦の出来事を秘かに花畑に投影してしまう事もあるでしょう。

この話は少年少女のために書かれた児童書ですが、いい年をした大人ほど、スポイト瓶から物語のエッセンスを一滴、心に染み渡らせ、安静と希望のひとつときをもたらしてくれそうです。

歳を重ねても健気であること。

柔らかな幼子の感性を持ち続けるためにも、優れた児童書があると思うのです。

三年前、白井先生から朗読のご指導を受けた際、奇しくも「秘すれば花」という言葉を命題のように受け取りました。

上部の表現ばかりに囚われていた私の心髄となりましたが、なかなかその答えとなるライブには至っておりません。

観客一人一人の想像の翼がどこまで飛翔するか、そこはお任せするしかありませんが、パンフルートの横地竹笛太郎さんの興す風の波と一体になって、ギター文化館のドームから降る物語がお客様とどう呼応するか楽しみます。

ことば降り

指先より花咲き舞い降る

十年の区切りを

共にお慶び申し上げます。

読者・持田順子様からのお言葉

ふるさと「風」を読ませていただき、創刊10年を迎えるとのこと「もうそんなにいっぱい読んだのかなあ」との思いです。

皆様の毎月の原稿書きご苦労様です。

私の感ずること発行当初、読んで下さる身近に感じ、楽しくもありました。

月日がたち最近皆様の上達に私の頭がついて行けない感が多々あります。

これからも皆様が健康で活動を続けられますよう読者として待っております。

それぞれの10周年

原人から現代人へ

打田昇三

「ふるさと『風』」も皆様にお読み頂き、お蔭を持ちまして本年は創刊以来、十周年、百二十号を出すことが出来ました。創刊時に比べれば会員も増えており、内容も充実して来たと勝手に自負致しており厚くお礼を申し上げます。何処まで続くか分かりませんが努力致しますので引き続きお読み下さいますようお願い申し上げます。

.....

日本は昭和二十年八月の敗戦時まで、天皇制による国家の歴史について一〇〇%嘘で固めた幼稚な神話を国民に強制していた。少年期に国家に騙され続けた現代の高齢者は、悲しいことに歴史解

釈が特に慎重にならざるを得ないのである。

戦後の教育ではさすがに非科学的な話は出来なくなつたらしいが、長年に亘り神様の時代を強調し過ぎた為には国家の成立に関わる日本列島の「昔」が曖昧にされている。明確に出来ない事情が有るとは思うが歴史は事実でなければ意味がない。

人類の黎明期に当る古代オリエントの歴史については世界の学者により詳細な研究説明が行われており、皮肉なことに日本では三笠宮を名誉会長とした日本オリエント学会がNHKの講座などで啓蒙に努めていて進化の過程は明らかである。

古代オリエントとは「アナトリア」小アジアと呼ばれる地方、現在のトルコなど「レバント」東地中海沿岸とその周辺「メソポタミア北部」「メソポタミア南部」「イラン（ザク羅斯山麓）」に大別されるらしい。その辺りが「肥沃な三日月地帯」と呼ばれる「農耕文明発祥の地」になるのである。紀元前三百年頃に北九州で弥生文化が成立したのはオリエントの農耕文明が日本列島にもようやく伝わって来た……と考えている。

凡そ七十万年〜四十年前という大雑把な区分ではあるが、前期旧石器時代（氷河期〜間氷期）と呼ばれる頃にアナトリアやイラン山地に小規模な氷河の跡があり、高原地帯は一面の草原で其処には象・犀・河馬・馬などが草を食べ水を飲み集まって来た。それを発見したのが「原人」と呼ばれる方々で、身の程を知らずに大きな動物を捕獲しようとして現れた。その足跡（あしあと）が奇跡的に残っていて「西アジア最古」とされている。足跡も粗末には出来ない。ただし身体はかくても相手が肉食動物では無かったから勝つたのであって是が猛獣であったならば、人類は喰われ尽くし絶

滅していたかも知れない。

原人たちは、さらに狩りをする為のキャンプ・サイトを設けて使用した石器類を残していった。その場所で石器も製作加工したらしい。学術的に「オルドワン」期文化」と呼ばれる礫石器で、東アフリカのタンザニアで最初に発見されている。

次いでシリアのオロンテス河段丘上キャンプサイトからは小屋掛け礎石や工具ハンドアクスが見つかっており是も西アジア最古とされている。

やがて十万年から四万年ぐらい前に最終氷河期が出現した。寒い中で「旧人」と呼ばれるネアンデルタール人などがザク羅斯山脈辺りの洞窟「イスラエルのカフゼー洞窟」やメソポタミア北部のシャニダール洞窟などに住み付いて、大きな枝角を持つフアロー鹿、ガゼル（鹿に似た牛科動物）などを捕獲したらしい。フランスで発見された遺跡から「ムステイエ文化」と呼ばれる此の頃のネアンデルタール人の宗教観念（死者埋葬・供花、など家族の死を悼み、死後の世界観を持った可能性）を伴う石器文化が確認されている。最終氷河期中期石器時代である。

地中海方面などに広がった後期旧石器時代は三万五千年前くらいから始まった。その頃に大きな気候変動があったらしい。地中海東岸に面したクサル・アキル遺跡など旧石器時代の遺跡もあるが、此の時代はレバント・オリーニャック文化、ケバラ文化、バラスト文化など、新人（現人類）による石刃技法が発達して狩猟も大型動物から山羊、羊、鳥と小動物の捕獲に移り植物性食糧の摂取が進んで自生する大小麦、豆類が食糧化した。気候の変化で年間降雨量が山麓で五〇〇〜一〇〇〇ミリとなったのが人類に幸いしたらしい。そうなる狩猟採取一辺倒で有った人類の生活も獲得経済

から生産経済に大きく変化してくる。

今から一万数千年前、其れまでの数百万年を野生動物と同じ様に狩猟採取で生きてきた人類が突然に心を入れ替えて農耕・牧畜の暮らしを始めた。イギリスの考古学者ゴードン・チャイルドは是を

「新石器革命」と呼び「オアシス理論」を著した。また、アメリカの考古学者R・ブレイド・ウッドは「旧石器時代と違い発達した農村集落はアツンリア平原などの低地に広がった」と考え、発掘調査などの結果を踏まえて、ザクロス山脈の山麓地帯を初期農耕牧畜の発生場所としたのである。

この説は「核地域説」と呼ばれる。文明の発展過程については諸説有るらしいが人類は旧石器時代から中石器時代、先石器新石器時代、後期新石器時代と発展を続けつつ現代に至っている。その一方で努力を重ねて地球に生きて来た古代に逆行するような挑戦的、独裁的な国家もあることは否定できない。猿から発展した悲しさであろうか？

感謝

兼平智恵子

ふるさと「風」をご愛読頂いている皆様のお陰さまで創刊より十年を迎える事が出来ましたことは大きな喜びでございます。心より御礼申し上げます。

石岡の地に参りまして十年余り、歴史の苦手な私に知人から歴史ボランティアガイド会員養成講座を薦められましたのが平成十三年の時でした。その講座で石岡には古代からの深い歴史がある事そしてこの歴史を知らない市民の皆さんが多い事

を知る事となりました。

その後一年余り過ぎまして、同じ養成講座を受講なさっていた当会報の白井啓治代表にご指導を頂く機会を得ました。白井啓治代表は脚本家であり文章のプロの方でした。

「画家であれ、俳優であれ作文力のない者は達成が難しい。今日の嬉しかった事の幸せを拾って言葉におとしなさい」

またしても二つ目の苦手、作文力が立ちませんでした。

それに風の会同期の打田昇三さんには「文章を書いて自分を表現するのは人間だけに与えられた特権だと思う。文章に表現を放棄して文作を嫌いだという人は人間を放棄していると思えない」と発破をかけられます。そして会員の小林幸枝さん、伊東弓子さん、菅原茂美さん、木村進さんには文作に折れそうな時、頑張っている皆さんが支えになってくれています。

障害に苦しみながら心開いて語ってくれている堀江実穂様、心に響きます。有難うございます。

サンケイ新聞関西版の夕刊に石岡を紹介して下さった京都の今井直様。現在は参考書では知り得ない貴重な国府巡りの手記を、楽しみにしております。有難うございます。

そして文章書き大好きな入会三ヶ月目のにわやまゆみこさん。にわやまさんは歴史ボランティアの会にも入会され、若さあふれる有望なそよ風さんです。

石岡の歴史を文章でお伝えするふるさと風の会員として、ガイドでお伝えする石岡歴史ボランティアの会員として「歴史の里いしおか」を大いに紹介して行きたいと思えます。

これからもずっと、ふるさと風のご愛読とて高評のほど宜しくお願いいたします。

又、皆様からのご寄稿と、是非のご入会もお待ち申し上げます。

十周年は、あつという間の長い道 小林幸枝

十周年と言われて、もうそんなに経ったのかと思うけど、毎月の原稿の事を思うと、あんなに苦勞してきたのにまだ十年なの？ と言うのが実感です。

ことば座の手話舞も、十周年を迎えたのですが、こちらは好きなことなので、十年が長かったという思いは全くありません。でも、白井先生からは稽古をサボり過ぎ。もっと大きく奇麗な舞になるはずだったのに、と叱られています。

五十歳で手話舞を完成させましようと言われていたのに、もう五十歳は目の前に来てしまった。舞台表現は五十歳を過ぎてからが勝負となるので、それまでに自分のスタイルを築き上げる。そういうわれ続けて来たのに、まだ自分のスタイルを創れないでいる状態です。

白井先生からは、健聴者の話す言葉を通訳する手話ではなく、聾語としての動作表現語で心を大きく舞えと言われています。

石岡に生まれた手話舞をもっと多くの人に知ってもらいたいし、手話舞女優としての自分をもっと大きくしていきたいと思っております。

皆様の温かいご声援、今後ともどうぞ宜しくお願いいたします。

早い。あれから十年も経ったかと思うこの頃だ。定年後の時間の自由さ、六年前に退職していた夫との生活が始まった。一緒に古墳の草刈りをしたり、実家へも足繁く通って今迄充分にとれなかった姑や姉、弟との時間を埋めていった。その後四〜五年経った頃、私の「我」が少しづつ芽を出して育っていった。

歴史や文書に時間を使っていこう。そこから現代に繋げていこうという気持ちが強くなって勉強し始めたが、文書を現代文に綴っていく表現に息詰まっていた。又好きな演劇で「天慶の月」に参加した余韻も冷めやらない時でもあった。

そんな時、しみじみの会主催のうさぎまつりで朗読劇に出会った。そこで白井先生率いる仲間の人達の言葉の表現の世界に感動した。先生の「上手、下手ではない、思いを表すこと」の言葉に支えられての出発だった。

歩いている時、自転車で、台所で、庭で言葉が弾けていった。一行文を楽しむことから始まった。一号、二号そして号が増えていく中で、数多い叱咤激励を頂いた。それらをみんなで噛み締め合って十年間続いてきたと有難く思いながら…。

※聞こえてきたことは受け止めていった

(恋とか愛とか多すぎて厭になっってくる)

(難しくわからない)

(批判することが多いんじゃない)

(石岡の悪口ばかりいわれると情けない、一緒にやっっていこうという気になれない)

(主人の世話で疲れきっているの、頂くのも

負担になっってくる)

(知っている人の文しか見てないよ。それが精いっぱい)

(興味ある文しか読んでいないよ)

(余裕のある人等がやってるんだらう)

(知識人だといいたい人達の集まりだらう)

※毎月読むのを楽しみにしているという人

(今迄頂いたものはとってあるよ)

(一冊読むのは一月がかりだという先輩。でも楽しみに次は次はと進むけど前の方は忘れてしまふ。でもいいの)

(読めない字があるよ。辞書を引きながら虫メガネの中に読めた字を喜んでいふよ)

※家にいながらいろいろな人と話しをしているようで楽しい

(この文を書いた人はどんな仕事をしているのかな)

(この文はどんな人生を歩んでこられた人なのか。どんな姿、形の人かと考えたりする)

(先生は優しい人間性をもった方ですか)

(この方はお医者さんですか)

(それぞれの考え、人柄、人生が良く出ていて、お一人お一人を想像しています)

※世界が広がったおもいですと喜ぶ方も

(私は家族の世話の明け暮れで、草臥れきった毎日ですが「風」を読むことで過去の人に出会ったり、広い宇宙を旅したり、世界中に出かけていって楽しんでる自分に気がつきまふ)

(「風」に出てきた県内の場所に出かけて行っ

てます)

(石岡へ用があつて出るときは、必ず一ヶ所へ寄ってきます)

※私への思いもよせてくれました)

(弓子さんは本を読まないからねといってくれた友がいる)

(だんだんよくなってきたわね。最初の頃は一寸いただけないものだったね)

(あまり身近なことを書くとき当たり障りがある人もいるんじゃない。気をつけな)

(前の俳句みたいなものよりずっといいね)

(貴女の人柄がよくでていふわ)

※毎月続けているってすごいわね)

(十年も続けてきたの、みなさん凄いわ)

(届けてもらうのは気の毒だからとりに行くよ)

(どんな所においてあるの)

(これだけの物誰が作っているの。お金はどうしているの)

(ただで貰っているの)

…など多くの方に誉められて喜び、批判されて励みとしてやってきた私達、これからもめげずに続けていく事を再確認し合った五月です。

私、個人も初心に戻っての再出発です。



同人会報などというものは、大方尻切れトンボの傾向が強いが、「風」の会報は、よくぞ、満10年・120号を達成したものと、我ながら感慨無量。

全会員、誰一人、1回も欠ける事なく、毎月、連綿と投稿を続けた努力は、自画自賛になるが、称賛に価すると思う。

毎月初めに全て自費でA4 20ページ500部強を、手作業で印刷製本。公民館など各部署に配布している。時々読者から、感想や激励のお言葉をいただくのは、誠に嬉しく私共の大きな励みになる。会員は高齢者や多忙な主婦が主体だが、絶対に「灯を消さない」が信条で、今日まで頑張ってきた。会員は色々なジャンルの人達で、話題の内容も豊富。それが投稿の原動力を生み出している。

私自身は、2007年12月、途中加入で、今回で103号である。その間、膵臓がん・悪性リンパ腫と2度も入院を繰り返し、強力な抗がん剤と闘いながら、投稿の灯が消えそうになった時もあった。しかし、投稿を続ける事こそ生きる原動力と考え、病气などに負けてたまるか：という気持ちでファイトを燃やし続けた。言わば、がんのおかげで、生き続ける闘志が湧いた：とも言える。

私が書き続けたい事は、終始一貫、「人間の進むべき道」である。市井の小さな道徳的行動もさる事ながら、地球環境を破壊し、他の動植物の生存を脅かしたり、そもそも人類の子孫の生存を、危うくする愚行をしてはならないという事である。『現在の地球は未来の子孫からの預かりもの』というコンセプトを、全人類がしっかり念頭に置き、はしやぎすぎた「偽の文明」を継続し過ぎない事。

愚かな軍備拡張など、ましてや人類を何度も滅亡させる原水爆保持など、断じて許されぬ行為である。歪（いびつ）な方向に進んでいる現在の世界情勢は、必ず軌道修正すべきである。

あらゆる交通機関は、むやみやたら高速化して、自然を破壊している。高層ビルや地下街など、更に、大都会に一極集中など、すでに直下型地震により、手痛い経験を持ちながら、なおも一層進行している。生物は一か所に集中すると、強烈な伝染病など発生があれば、大打撃を被る。しっかり子孫を残すためには、分散する事が重要である。

我々の住む地球は、いわば饅頭のようなもので、地殻は、マグマという巨大なアンコの上の「薄皮」のようなもの。アンコが何かの都合で膨れ上がり、沈下しようものなら、薄皮はたちまち破れる。それに見合った構築物を築かなければ、賢い文明とは言えない。マグマは、内部で高温になれば表面に湧き上がってくる。冷えたマグマは、当然沈んでいく。我々の住む地殻の厚さは、わずか数十km。要するに、火の玉の上の薄い皮の上に住んでる事を決して忘れず、真の文明を築くべきである。科学が進み「断層」など存在がわかっていけるのだから、明確な危険区域は避け、安全な場所に小さな町をいくつも作るべきである。

地震・津波・火山噴火など、何年かに一度は必ずやってくる事をしっかり計算に入れ、この地球の表面積に適合した人口密度を保つよう、生殖は自律性を確保すべきである。かけ離れた理想論と言われてもしょうがないが、3千年前の日本列島の縄文人の数は10万人と言われる。現状の千分の一である。縄文人の人骨4千体を調査の結果、戦いなどによる傷跡はない。この密度なら戦は起き

ない。しかしすぐ後の弥生人の骨には断首・骨折など無数といわれる。

人類は進化の過程で、あまりにも子供を増やすシステムを取り入れてしまった。他の動物は、息地の食べ物の多寡により子孫の数を自律コントロールするシステムを取り入れた。しかし人類はそれとは反対の進化を遂げてしまった。私は諸悪の根源は「人口過剰」にあると考える。動物は、生きるためには、一定の面積が必要である。即ち「縄張り」の確保である。安全に衣食住を確保するために、浅はかな知恵の人類は、直ちに戦争・侵略という手段を行使する。過去数千年の歴史を見れば、戦争のなかった時代など、見当たらない。強欲をコントロールできない方向に進化している。

ホモ・サピエンスとは、「知恵ある人」という意味なのだから、もう少し知恵を働かし、強者が弱者から奪うのではなく、平等に、ユートピアを築く努力が、なされるべきではなかったのかとも思う。

人に飼われる動物を「家畜」という。人間も、見方によっては、人に飼われている家畜と言えなくもない。家畜化した人類は、先進国では、栄養・医療・介護・新生児や児童の保護システムなどにより、長寿が確立した。しかし、あまりにも長寿が進めば、人口ピラミッドのバランスが崩れる。21世紀を迎え、知恵ある人は、合理的な人口コントロールに、焦らず、ゆつくりと着手すべきである。押し合い、へし合いの世界から、早く脱出するよう、世界の知能を集集すべきである。

イギリスに『老犬は無駄吠えをしない』という諺があるが、私も年老いてあまり大声で吠えまくるのは、いささか気が引ける。しかし聖人ぶって

沈黙を美德とする態度も、偽善に見える。折角、「風の会」は、自己責任で何でも書こうという趣旨で活動しているのだから、思う存分、毎月、私見を述べ続けたいと思う。私は純然たる理系。八十路を過ぎても常に科学雑誌から、最新の情報を入手している。近代科学を根拠に、今後人類の進むべき道のりを、大声で吼え続けていきたいと思う。

世界各国がそれぞれ「国益」のみを主張し続けられ、必ずどこかに歪を生じる。経済優先・軍事優先は、人道に反する。人類は衣食住をもう少し節約して、地球を痛めつける態度を減少すれば、滅亡の危機は簡単にはやって来ないと信じる。

人類は永続したいのならば、狼のように、規律を重んじる高度の社会を確立すべきである。

ちいさなお話し

木村 進

街外れにとんがり屋根のしゃれた外観の一軒の喫茶店がありました。

三月も終わりに近づいたある晩、ある年配の夫婦がこの店にやってきました。店の外は、この時季としては少し肌寒く、家路を急ぐ人たちもどこか気忙しく行き来をしていました。

店の中では、若い二人連れや、いかにも友達同士と思われるグループが何組か飲み物やピザなどを目の前のテーブルに並べて、いかにも楽しそうに会話を弾ませています。

「いらつしやいませ。お二人ですか？」若い感じの良い女店員さんがニコニコしてこの夫婦を向

かい入れ、調理場に近い空いたボックス席に案内しました。

そしてすぐに若い店員さんがお水とお絞りを持って二人の席にやってきました。

「お決まりになりましたら、お声をおかけ下さい。」

「このお店はカードが使えるんですか？」

その年配の紳士は、少し気まずそうにたずねました。

「申し訳ありません。会計は現金のみとなっております。」

「そうですか、あまり手持ちの現金が少なかつたので、カードを使いたいと思ったのですが……。」

このお店は喫茶店ではありませんが、ピスタやピザなどのイタリアンでも人気のある店で、この料理目当てに来る客もたくさんいました。

その紳士は「店の入り口に張ってあった『季節限定の〇〇パスタ』はメニューのどこにありますか？」この二人はこちらの料理を目当てに入ってきたようです。

「はい、こちらは季節限定商品ですので、こちらのメニューにはなく、別冊のメニューのこちらにあります。」

紳士はメニューを見て、思ったより高いと感じたのかメニューを一瞥すると、通常メニューの方を指して、「私はこちらのペペロンチーノで、妻にこの野菜やきのこの入ったパスタをお願いします。」

「承知いたしました。しばらくお待ち下さい。」

女店員さんはハキハキした声で注文を繰り返すと店の奥に戻っていききました。

厨房では店長と思われる男性料理人がピザ釜にピザを入れて焼いています。

お店の中はかわいらしい飾りつけもがしてあり、暖かい色の照明が夜の店内を明るく照らしています。そして窓の外は通りを行き来する車のライトが流れています。この夫婦も楽しそうに会話をしながら店内を見渡したりして料理の到着を待っていました。

しばらくして二人が少し手持ち無沙汰になり始めていたころ女店員さんがこの夫婦の元にやってきました。

「お待たせして申し訳ありません。料理はもう少しお時間がかかりますので店長が飲み物を差し上げてと申しております。この中から選んでいただけますか？」

とメニューを広げました。

「え！ 飲み物をサービスしていただけなのでですか？」と紳士。妻の方もうれしそうに「ではレモンティーをいただいてもよろしいですか？」

「では同じものをお願いします。ありがとうございます。」と紳士。

そしてレモンティーがすぐに運ばれてきました。それからそれほど待つこともなく料理も運ばれてきました。

すると店員に向かってご婦人は「私、今日誕生日なの。今日主人と、どこかで食事をしようとしたら、行こうとしていたお店が一杯だったのでこちらに来ました。ここにも前に娘たち夫婦と来たことがあり美味しかったのでまた来てみたくなつたの……。」とうれしそうに話しかけました。

女店員は「お誕生日ですか？ それはおめでとうございます。お店では誕生日のお方にはあそこ

にある手作りケーキをサービさせていたでいてるのですよ。どれでもお好きなものをひとつ選んで下さい。」

「あら、ケーキまでいただけるなんて、うれしいわ。ではあの美味しそうなイチゴの載ったケーキをいただけますか？」

「イチゴショートですね。少しお待ちください」
このお店の手作りショートケーキは、大きなイチゴのつたややかなスポンジと上品な甘さのクリームがマッチした人気のケーキです。

食事が終わるころになってケーキが運ばれてきました。そして「美味しいね」と言いながら、これを二人で分けて食べるのを女店員さんも店長さんも気がつかれないようにそつと見守っていました。

会計を済ませ、ご婦人は「ありがとうございます。今日は美味しいお食事と、楽しい時間がすごせました。一週間後には主人の誕生日がきます。またぜひ邪魔させてくださいね。」と丁寧に頭を下げて二人仲良く暗くなった店の外に出て行きました。女店員はドアを閉めて出て行く二人をニコニコして見送っていました。

ちいさなお話しはこれでお終いです。

もうお気づきになられたかもしれません、この老夫婦は私と妻です。昨年秋に三子が結婚して今では夫婦二人きりの生活です。私は企業の仕事はリタイアとなりましたが、少し働けるうちはと地域興しや頼まれた仕事なども続けています。妻はNPPOなどを立ち上げて今でも福島避難者の支援と言って毎週土曜日にいわき市の仮設住宅に出

かけています。

この「小さな話し」に書いたように、何気ない日常の生活の中にもいろいろ心に残る出来事があります。これからも元気なうちはそこに生活する人たちとのふれあいも大切にしていきたいと思えます。

「ふるさと風の会」10周年おめでとうでございます。私は途中からの会員で、79号からの参加ですからまだ三年半です。でもこの会に参加して本当によかったと思っています。

今から約10年前に妻が石岡の地が好きで隣町（かずみがうら市）から越してきました。私は近くの企業勤めでしたから会社が少し遠くなっただけで特にこの地への思いなどまったくありませんでした。現在は地域に埋もれた歴史などを掘り起こしてブログやこの会報を通じて情報発信を行っています。少しだけ紹介させていただきたいと思います。

今から9年前、転居して1年ほど経ったある休日に石岡の史跡などを少し見ておこうと何箇所かをまわってみました。どこもこれと言って特別な感激するような場所はありません。私はエンジニアで文系の科目は苦手です。特に根っからの歴史音痴です。歴史上の人物なども戦国時代の軍師などにあこがれて多少興味のあるものもありましたが、中国三国志の方がよほど面白いと吉川英治の本を何度か読んだ程度で、日本史にいたっては年代も人物もちんぷんかんぷんでした。そのころ、ホームページの作成などを趣味で始めていたのですが、石岡のホームページはまったく他の似た都市に比べて見劣りがして見えたのです。最初は行政に向かって「何とかしてくれ！」と不平を

つぶやいたりしていたのですが、待っていてもしばらくは変わりそうにないので、それでは「自分で石岡を紹介してみよう。」と思い立ったのです。その時に作ったのが「1300年の歴史の里石岡ロマン紀行」というホームページです。ここにはいろいろな手法を自ら勉強すると言う技術的な楽しみもありますが、記事を作るうえで名所旧跡、町並み、路地裏などを訪ね歩いてまとめるという楽しみもありました。そして「行政ができないのでやってやる」という気負った思いが気持ちのどこかにかあったのです。

しばらくやればこのインターネット社会です。雨後のタケノコのようにあちらこちらからいろいろな情報発信が湧き出すように生まれてきて私のHPなど埋もれてしまうと思っていました。

またそれで良いのだとも思っていました。でも想像していたようには情報発信はあまり増えませんでした。町おこしなどと言ってもその町の住民がその気にならなければ興せません。この町にもまだまだ目には見えない古い体質が多く、住民の方の心の奥底に染み付いています。

町が発展しているところはさまざまな情報発信が多いところです。情報が多いところに人が集まるのです。人が多く訪れる場所に情報が集まるのはありません。ですからどんな形にせよ情報を発信する発信力が欠かせないのです。

この意識改革ができるのは見ていると昔からお住まいの旧住民と他所から新しく住み着いた新住民の数が逆転したところばかりです。どこもそうなのです。人口減少や年寄り人口の増加は間違いなくやってきています。

「東京から一番近い里山」というキャッチフレ

―ズを八郷地区の里山景観を見て思います。石岡はお祭りや看板住宅の昭和ロマンなどが売りですが、私のこの町の歴史を感じるスタート地点は「石岡は古東海道の終点都市」ということです。こんな切り口でふるさとに眠る埋もれた歴史の掘り起こしやそこに吹く風を感じて紹介することを続けていきたいと思っています。

ホームページの方は地域の紹介がメインですが個人の想いや、そこで感じた風の音・においなどは書けません。その想いを書きたいと始めたブログ「まほらにふく風に乗って」も5年以上になります。これも一日も欠かさずに連続記録を更新しています。「まほら＝真秀ら」のこの地について、これからも書き続けていきたいと思っています。

高浜神社にも関係の深い山岡鉄舟が臨終のときに奥様に書いて渡したという司馬温公の家訓があります。「金（かね）を積み もつて子孫に残す子孫未だ必ずしも守らず 書を積みもつて子孫に残す 子孫未だ必ずしも読まず しからず陰徳を冥々のうちに積み もつて子孫長久の計となさんには これ先哲の格言にして すなわち後人の亀鑑なり」

過去の遺産の上にあぐらをかいていても、財産を譲られた放蕩息子がその財産を使い果たせば何も残りません。「陰徳」とは人のために陰ひなた関係なく良いことをなすことだと思います。何かをやったあげた、ましてや見返りを望んで何かをするなどと言うのは陰徳ではありません。陰徳を積みめば、子孫が困った時にもまわりの人もよるこんで手を貸してくれる。これが子孫繁栄の基になるのだと思います。

私もこれからは色々な人のためになることを骨

身惜しまずに出来る人になりたいと思っています。

竹丸と虎吉

にわやまゆみこ

「竹丸。おまえは私の前を行け」
オツムが弱く使い物にならない俺に、小隊長はいつもそう言った。

此処は青きペリリュー島。
見たこともない極彩色の世界と、じつとりと絡みつく熱い空気。

いやあしかし、世の中いろんな処があるもんだ。
と濃い空を見上げてつぶやく。

銚田を出てからいったいどれくらいの日日が過ぎたのか。数えることもできない。

ある朝、家の前までトラックがやって来てガタガタと家畜のように運ばれた。まあ、だいたい知ってる奴ばかりだった。この先、俺たちはどうなるのか？ そんなことはわからねえし考えることすら無かった。汽車にゆられてどこだかわからぬ港へ。ぞろぞろと続く重い列。途中、他の船はぼっこりぼっこり次々沈んでいった。

俺はツイている。難しいことはわからんが「偉い人」が同乗していたおかげで生き延びた。
いやあしかし、世の中いろんな処があるもんだ。
と濃い空を見上げてつぶやく。

俺はツイている。難しいことはわからんが「偉い人」が同乗していたおかげで生き延びた。

アイツら海中に沈んじまったなあ。故郷の墓には入れねえだろうなあ。あくあ、ナンマンダブ、ナンマンダブ。

不味そうな色をした魚を見ながら掌をこすり合わせる。

「：けえ〜」

…？ツ

「竹え〜！」

遠くから聞き慣れた訛り声でした。

「竹え〜！」

おお！ありや「虎吉」だ。

コイツは俺の幼馴染。家もすぐそこだった。ツイこないだまでよ、あーんな畑の中さ居たのによお。まったく、南の島が似合わねえ二人だなあ！
カツカツカツカ！

「竹え〜！」

「ああ〜？ なんだよお？」

「竹え〜！」

「た… けえ… ハア… ハア…」

やつと虎吉が近づいてきた。

「オメエ、相変わらず走ンのが遅えなあ！」

ズギユ-----ン!!!

!!!

つて、うおーーー!!!

あぶねえ忘れてた…。

「戦争中」だったな！

「竹丸。おまえは私の前を行け」
小隊長はいつも俺にそう言っつて、専属の護衛として一目置いてくれていた。

オツムが弱くて伝令が出来ない俺は、生まれつきの野生の身体能力がかわれたようだった。
しかし。

自分の前方に人は居ねえし、まわりになんか合わせられねえし、おまけに動きが早い！ ときたまもんだ。気が付けば護衛どころか、隊からサッサと外れてしまっていた。

「竹え〜！」

虎吉は賢い。特に「ズル」がつけば天下一品だ。きつとうまいことやつて俺ンとこに来た。

（バギューン！）

「竹え〜！」

「なんだよ、虎吉い〜?!」

「竹！ 逃げつぺ!!!」

人間、死んだら終つちまう。俺たちは弾をよけ、身を隠し、島中を逃げまぐる事にした。

命の大切さ、殺し合いの無意味さは本能で知っている。

… … …

『ペリリュー島の戦い』

ひどく玉碎した。と記録では残っているが水戸第二連隊の次発組だったうちの爺ちゃん達は、大して戦うこともなく、生き延びて帰ってきた。

実は、けっこういたらしい。

「名誉の戦死」の時代。のこのこと生き戻った記録などどこにもなかった。

戦争が終わった後、爺ちゃんは石田の婆ちゃんと結婚。（しかも最先端のオメデタ婚だ）

指示に従えないので使い物にならないのか、どこにも雇われることもなく、野生の勘でひらめいた商売を軌道に乗せ、その仕事先で婆ちゃんを見初めた。そして母親に楽をさせながら四人の子どもを育てた。（もっぱらそれは婆ちゃんの役だった）

私が小さい頃は、そんな島仲間が爺ちゃんちに遊びに来ていて、まだ足に埋まっている弾のお披露目とか、現地での思い出話なんかを失われた青春を取り戻すかのように、毎日毎日、土間でのお茶会がひらかれていた。あのジャリつという床の砂とパイプ椅子が出す奇妙な音、煎餅の香りは今も耳と鼻先に焼き付いている。

そうしているうちに、「虎吉じいさん」も友人も病気になるって死んでいき、現在は本当に「竹丸じいさん」が生き残りとなっている。

九十二歳。なかなかお迎えが来ない、と涙を流す。地球での刑期が長い人みたいだ。

ペリリュー島の話しは三時間は止まらない。テープの繰り返し再生みたいだったけど、若きあの日々、少年達の記憶にくつきりと鮮やかに、そして残酷に刻まれているようだ。自分の命も沢山の命の上に乗っかって居る。

「おじいちゃん、ながいきしてね」

近頃は、そう書くのをやめている。

（月末の戦没者、パラオの全魂に捧ぐ）

10周年特別寄稿

土とオカリナの関係

オカリナアートJOY 野口喜広

古代ギリシャ・ローマなどの古いヨーロッパの思想で「この世界の物質は四つの元素（土・水・火・空気＝風）から構成される」とあります。これを「四大元素」と言うそうです。この他にも古代インドの「四元素」、又は古代中国の「五行（水・木・火・土・金）」も非常に酷似している思想です。ここで四つの元素を改めてながめてみると、オカリナを作られた方ならピンときたはずですよ。そうですオカリナ（土笛）はこの四つの元素（土・水・火・空気＝風）から出来上がっています。ちなみに、オカリナを作る材料の粘土は土の中でも最も小さな粒子で0.002mm 以下のものです。それに水分が入ると粘り、可塑性（形を自由にできる性質）が出てきます。

このように、『土』は古来から大切なものとして扱われてきました。オカリナ（土笛）はもしかすると楽器の域を超えた万物の象徴なのかもしれません。

さて、ここで土について調べたことを簡単に皆様にご紹介いたします。土は岩石からできています。土の祖先は岩石です。岩石は外界からの風雨・熱・圧力で破壊され土の材料ができます。初めてこの地球上に土の成分ができたのがおよそ四億年前です。

それでは、長い年月をかけてどのように養分豊かな土に成長するかと言いますと、まず初めに岩石の風化生成物により、ほとんど養分を必要とし

ない地衣類・苔類が最初に生え、次にこれらの植物から生じた養分を利用して、別の微生物や光合成を営むことのできる小型の植物が生えていきま
す。こうして土の有機物は増えていき、さらに大
きな植物が成育できるようになります。そしてま
た土の中では多くの微生物（細菌・糸状菌・酵素
など）や小動物（ミミズ・トビムシ・ワムシなど）
が有機物を食べ、無機物に分解（浄化作用）してい
くのです。この繰り返しによって、岩石の風化生
成物は次第に現在見られるような土となります。

このように、岩石の崩壊や風化作用と物理的・
化学的な作用と、動植物による生物的作用とが相
伴って長年かかって生成されたものが土になった
そうです。

さて、土の中にはどれほど多くの生物が生命活
動を行っているのでしょうか？ わずか盃四〜五杯
の土の中に数万種の生き物がいて、さらにその数
は全世界の人口と同じかそれ以上の微生物や小動
物がいるそうです。まさに土は生きているのです。
（オカリナは700〜1000℃の高温で焼いて
いるので微生物は生きていませんので心配ご無用）
このように、土は生命を支える命の源であり、
私達のふるさととも言えます。そして長い年月を
かけてできた土には地球の歴史が刻まれています。
そんなロマンを感じながら、これからもオカリナ
（土笛）の世界を広めていきたいと思っています。



万葉落語『明日香風』 京都府精華町 今井 直

天武帝（てんむのみかど）の皇子でいらつしやる長
皇子（ながのみこ）は、佐紀の宮にお住まいでござい
ます。この日は邸宅の新築祝いとして、志貴皇子
（しきのみこ）をはじめ多くのお客さまが招かれまし
て、いまや宴たけなわ！

「采女のお 袖え吹き返す 明日香風えり
都を遠みいり いたずらに吹くう」

志貴皇子の歌を唄い終え、盛んな拍手の中、舞
台を降りてまいりましたのは、相楽娘子（さがなか
のおとめ）。売れっ子の遊行女婦（うかれめ）でござい
ます。歌舞・音曲に秀でた芸でもって、貴族の宴
席にて座を取りなす女性を遊行女婦と申します。

現代の芸者さんに似た職業と言えましょう。出石
（いずし）という若者が付け人として、相楽娘子の
身の回りを世話しております。

「志貴さまのお歌って本当に素敵ねえ♥あたかも
唄い甲斐があるわ」

「拍手しながら」娘子（おとめ）さん、最高ッ！
歌の中の采女さんの姿が目に見えるようで、『袖吹
き返す…』のサビの一節には、鳥肌がたちました。
そよ風にひるがえる袖の隙間から、二の腕がちら
ツと見え、まあセクシーなこと！娘子さんの肌は
華奢で、透きとおるように白いですね」

「色っぽく」あらあ、いやな人！
「長さまは身を乗り出して、うっとり聞き惚れ
ていらつしやいました。きつとまたご指名がかか
りますよ」

「嘘お、長さまは弟日娘子（おとひおとめ）ちゃんが
ご最頂なのよ。あの娘は、確かに美人だけれど、
唄だけは絶対ッ、負けたくないの」

「「ヨイショして」娘子さんのお色気には、弟日
さんは逆立ちしたって、かないませんよ」

「苦労知らずの弟日ちゃんは、ただ可愛いだけで
売れてるけど、あたいなんかは生まれてから、親
の顔も知らず天涯孤独でしょ…生きていくには、
芸で勝負するツキやないのよ」

「娘子さんは、いつもプラス志向で底抜けに明る
いから、志貴さまも最頂にして下さるんですよ」
「まア、出石も口が上手くなったこと！」

他愛もない楽屋話に花を咲かせておりますと、
外で蹄の音と共に、馬のいななきが聞こえます。
今しがた駆けつけて参りましたのが、藤原不比等
大宝律令という国家の法制度の整備を成し遂げ、
今や飛ぶ鳥を落とす勢いの右大臣でございませう。

この右大臣、新築祝いとして長皇子に献上する
ために、一頭の馬を連れてまいりました。艶やか
な栗毛の名馬で、名前を『疾風（はやて）』と申しま
す。乗馬の名手としても名高い長皇子は、たいそ
うお気に入り様子で、自ら疾風にかいばやおか
らの餌を与えておられます。

「あらあ、右大臣さまはまた遅刻よ。こういう席
になると、決まって遅れていらつしやるんだから
…お忙しいばかりじゃなく、『俺は偉いのだ！』
と、恰好ばかりつけて、本当にいけ好かないッた
ら、ありやしないよ！」

「そりやあ、天智帝（てんちのみかど）の右腕でいら
した藤原鎌足さまのご子息ですから、家柄は申し
分ありませんし、ひよつとすると天智帝のご落胤
かも…すると、志貴さまとは異母兄弟？…な
んて、巷ではいい加減な噂がたっています。つい
先頃も、ご息女の宮子さまが、帝の皇子さまをご
出産されたから、鼻が高くなるのも当然でしょう」

「でもまあ、本当に野暮で武骨なお方よ。粹というものをぜーんぜん、ご存知ない嫌な人ッ！歌ひとつ詠めないんだから……大体、あの脂ぎったお顔がねえ……連れていらしたあのお馬、見たあ？大豆の絞りかすばかり、食べてるの」

「どの馬もおからは大好物ですよ」

「嫌なお客の前でも唄わなきゃならないなんて、『舌打ちして』ちッ、まったく因果な商売よ！」

「ねえ娘子さん、あの噂は本当でしょうか？志貴さまは今や重要なポストはすべてホサれて、閑職にまわされていらつしやるという」

「お気の毒に、どうもそのようね。持統帝（じとうのみかど）が権力をすべて握って、反対勢力はことごとく粛清されたでしょ……だけど志貴さまは、感受性が豊かでとってもナイーブなお方だから、権謀術数がうまうまく政治に携わるよりは、歌の世界に没頭していらつしやるほうが、ずっとずっと素敵よ」

「長皇子さまは？」

「長さまもかつては、皇位争奪戦のトップグループのお一人でいらつしやったけど、軽皇子さまに敗れて落選！」

「軽皇子さまって、今の帝のこと？」

「そうよ。軽皇子さまを猛烈にサポートなさったのが、あの脂ぎった右大臣さま。ちッ『舌打ち』」

「長さまは、志貴さまと仲がよろしゅうございませぬね。お互いに境遇が似てらつしやるし……」

「そうね。あら、今日は弟日ちゃん、来ないの？」

「風邪でのがガラガラ、声が出ないそうです。さ、次の出番ですよ、娘子さん」

「次はなあに？志貴さまの『葦辺行く』に続いて、長さまの『霰（あられ）打つ』なの？ねえ出石、そ

れはあんたが唄いなさい。あんたも但馬国から都に出てきて丸三年、そろそろ舞台上に立つてもいいでしょ。あたいとデュエットしましょ♥」

「えっ、マジで？」

「さあ、今宵は錚々たるお客さまがお集まりだから、あんたにとつてはこの上ないデビューよ。しっかりと唄いなさい。琵琶で伴奏してあげるから」

「有難うございます。心をこめて唄います！」

葦辺（あしべ）行く 鴨の羽がひに

霜降りて 寒き夕（ゆうべ）は

大和し思ほゆ

葦原の鴨の翼に霜が降り、底冷えがする今宵は、大和で待っている妻のことが思われるよ……と、相楽娘子が唄い上げ、宴がいよいよ盛り上がります。と、その時突然、異常事態が発生いたします。なぜか五弦琵琶の一の糸がぶつと切れるハプニングが……大変なことになるました。さすが相楽娘子は、動揺のかけらも見せず演奏を続けますが、出石はただウロウロするばかり。

「霰打つ……、……霰、打つ……ええーと」

すっかりアガって、血迷っております。すると右大臣・藤原不比等から鋭いヤジが飛びまして、

「下手くそめッ！下手な唄なんぞ聞きたくないぞ。とつと消え失せろ！」

華やいだ宴席が、一転して騒然となります。相楽娘子は機転をきかせてその場を取り繕い、舞台を降りてまいります。

琵琶の弦は絹糸を擦り合わせて作られたものですが、相楽娘子はこの日に限ってスペアを持ち合せず、さあ、困り果てました。昔から諺に『弦の切れ目が縁の切れ目』と申します。……嘘です、これは。

「もうッ、あんなこと言われたの、初めてよ」

「申し訳ありません！私が……」

「あんたのせいじゃないから。ちッ、何とかして右大臣の奴の鼻を明かしたいねえ。悔しいイ」

「そうだ、娘子さん！待っていて下さいよ」

出石がパツと外に飛び出したかと思うと、すぐに手にしてまいりましたのが、数本の馬の尻尾。

「これで代用できませんか？一の糸に……あの栗毛の馬から少し抜いてきたんです」

「えッ、お馬の？それはヤバイよ。誰にも見られなかつたかい？大丈夫？……さあ肝心の音色はどうでしょう……まあ、試しにやってみましょ」

相楽娘子は音質を確かめつつ、琵琶の弦を張り替え始めます。結局は五弦ともすべて馬の尻尾に取り替えまして、爪弾きいたしますと、意外に高音に伸びがでて、郷愁をそそる不思議な音色！娘子もこれでいけそうだという感触を得まして、再度舞台へ……。弾き語りで長皇子の御歌を披露いたしますと、娘子の演奏の腕が冴えわたり、趣の深い旋律が流れます。宴席は水を打ったようにシーンと静まり返り、皆が耳を傾けます。

霰打つ 安良礼（あられ）松原

住吉（すみのえ）の 弟日娘子と

見れど飽かぬかも

霰が降りしきる安良礼松原は、住吉の弟日娘子と同じで、いくら見ても見飽きることなく美しいことよ……と、唄い終えますと、割れんばかりの喝采が起り、歓声があがります。右大臣は打って変わって上機嫌で、声をかけてまいります。

「おお見事！見事な唄声じゃ。長皇子さまもたいそう感心なされた様子……麻呂も気に入ったぞ。もつと近こう参れ。褒美を取らずぞ、何が所望じ

や？ああ遠慮せずに申してみよ。ルイ・ヴィトン
がよいか？それともティファニーか？」

「お気に召しまして、有り難き幸せに存じます」

「志貴皇子さまも、あとひと節聞きたいと仰せじや。アンコールに応えてはくれぬか？」

「先程はとんだ不調法を致しまして、深くお詫び
申しあげます。では、御リクエストでございます
から、志貴さまの御歌を唄わせていただきます。

「石（いわ）ばしいるうく垂水いの上のお

さ蕨のく 萌えく出するう春にい

なりにけるかも」

「霰打つ冬の歌から、さ蕨の春の歌へと、なるほ
どアレنجも考えたな！ 鬘屑にするぞ、相楽娘子
。そちが奏でる琵琶は、今までに聞いたこともな
い不思議な音色じやな。麻呂にその琵琶を見せて
はもらえぬか？……「琵琶を手に取り」おう、これ
は！この弦はいったい何でできておるか？」

「えー、それは、……毛でございます」

「……ん？今、何と申した？」

「えー、毛でございます」

「ケ？ケとは髪の毛か？ほう！髪を弦にすると
珍しい。長い髪であるなあ、しかも茶髪である！
真にこれは、髪に相違ないか？」

「……」

「どうじゃ？如何した？相楽娘子」

「……」

「なかなか尻尾を出さぬな！色艶からして、麻呂
には馬の尻尾のように見えるが……」

この一部始終を見ておりました志貴皇子が、こ
こで助け舟を出します。

「まあまあ、右大臣殿。弦が何でできていようと、
よいではないか。相楽娘子の手にかかれば、かよ

うに素晴らしい音色となつて、皆を楽しませてく
れる……春爛漫の今宵は長ちゃんのお祝いの席、
良い唄を聞けば、酒もいっそう美味なるぞ。弦が
切れるのはまだしも、右大臣殿がキレられては、
貴公の沽券に関わります。ことを荒立てるのは
いかがなものかと存するが、右大臣殿

「いや、必ず尻尾は挿んでやるッ。もし疾風の尻
尾であれば、許しがたいこと！疾風に尋ねてみよ
う……なあ疾風、おまえ、尻尾を抜かれて痛かつ
たか？……さぞ痛かつたろう」

右大臣が何を話しかけても、疾風は知らん顔。
「うーむ、おまえは豆の絞りかすばかり食べお
つて……馬事豆腐か！」

何を言われようと、栗毛の馬は食べることに夢
中で、口をモグモグさせております。

「おい疾風、何かひと言いつてみよ！」

すると、名馬・疾風が、「ドヤ顔で」うまつ！」

「ハガキ」

お母様、お元気ですか。私達は、ぶじに福島に
着きました。こちらでは、長ちようさんを始め、
婦人会の方や、国民学校のお友達が駅までお迎え
に来て下さいました。そうして婦人会の方々が、
私達に麦茶をごちそうして下さいました。とても
おいしかったです。

お寺へ着くと、皆、親切です。そうしてお茶と
おりんごをいただきました。これからも、うんと
いただけると思うと、薫（注・妹）にもあげたいで

古い手紙 学童集団疎開の… 合田 寅彦

す。お昼前に、神社参拝をいたしました。それか
ら三時頃、皆でお風呂へ行きました。これから皆
で生活するのがとてもたのしみです。では又差し
上げます。さようなら

一九・九・二 初五女 翠より

お母様へ

「封書」

……今日、又こんな御心配をおかけするのは、
ちよつとつらいのでございますが、とりいそぎお
願いしたいのです。それはこの前に佐藤さんが頭
が痛いとおふらふらしていましたが、森本さんも似
て、やはり熱があります。川上さんはひどく下痢
します。心配ですので、お医者様に昨夜みて頂き
ました。すると、風邪と思いましたが、すべて
大腸が悪いのだそうでございます。私が病院や家
でやってました食餌療法を是非こころみたいので
す。昨日から今朝お台所で大きわぎして、おもゆ、
くずゆ（じゃがいもをすつて、ふきんでこしたの
ですが）、だしのおすましを十人分こしらえました。
他に七人も一週間下痢している子供があります。
それで、一人か二人なら、こして片栗をつくるの
ですが、とても大変なのです。もし、このクラス
でお母様集まっていただけでしたら、片栗粉を少
しても何かの方法で送って頂きたいのです（裏漉
し器が空いているのがありましたらおかりしたい
です）。片栗とかつをぶしはおだしをおとるのに少
しやはりお願いしたいのです。それからだんだん
よくなりましたら、ふのようなもの、少しでよろ
しいのですから、なるべく早く送ってくださいま
せ……

一九・九・一五 沼尻麻紗子

合田静子様

昭和一九年六月三〇日、米軍による空襲が激しくなることを受けて、ときの政府は「学童疎開促進要綱」を閣議決定し、同年八月から全国一三の大都市および工業都市に住む国民学校（今の小学校）初等科三年以上六年までの学童を強制的に疎開させた。

縁故疎開を奨励したものの、その伝（つ）のない学童は各学校が空襲のない地方の旅館、集会所、寺院、教会などを借り受けて授業を行なった。付き添いの職員は、生徒一〇〇人につき教師二名、寮母四名、作業員三名とし、それに地元の嘱託医を置いた。

ここ石岡市八郷地区では、昭和一九年九月二三日から二〇年五月上旬まで、東京の戸山国民学校の生徒が集団疎開で来ている。宿舎は、柿岡会館（現存せず）、常林寺、善慶寺、如来寺、浄土寺が充てられた。（八郷町民文化誌「ゆう」3号・4号参照）

冒頭のハガキおよび封書は、東京中野区N国民学校初等科五年の私の姉・翠と、その担任・沼尻麻紗子（仮名）先生が私の母・静子に宛てたもの。当時沼尻先生は、写真から受ける感じでは二七、八くらいではなかったろうか。母は二九歳だった。差出しの住所は、「福島県伊達郡桑折（こおり）町大安寺内」とある。

昭和一九年九月から翌二〇年三月までの間に、沼尻先生から母宛てに来た手紙は長文の封書が二〇通、ハガキが五通。その中身は、五年父母会のもとめ役をしていた母を通して父母会に宛てた担

任としての状況報告のものが三、四通あるものの、大方は母に対してだけの私的な感情を吐露したもののばかり。文面から推して、孤独な女教師が唯一母を頼りに書いたものと思われる。

なお、兄・正彦は同じ国民学校初等科三年で、福島県信夫郡飯坂町の池田旅館が疎開先だった。

因みに、疎開先から野方のわが家に出された手紙は、姉・翠が封書一三通、ハガキ一八通、兄・正彦は封書六通、ハガキ一三通。なお、拙い兄のものはここでは省いた。

（本稿では、読者が読みやすいように、手紙にある歴史的仮名遣いは現代仮名遣いに、漢字の旧字体は新字体に改めてある。）

「ハガキ」

そちこちに虫の声賑わしく、秋も日一日と深さを感じます。その後お健やかにお暮らしのことと御察し申し上げます。先日は本当に有難うございました。たつた一日のことではございましたが、私共にとりましては、この生活を少しでも御覧下さいましたこと大へんにうれしく存じておりました。もっともつと知って頂きたかったのですが、致し方ございません。東京へおかえりになりましてからもそのご報告にさぞかしおつかれ様のことでございませう。何卒御身体に御気を付け下さいませ。お帰りの節、お弁当をうつかり致しまして、お忘れしましたこと、何とも申しわけございません。あとで気がつきまして、どうしようかと思いました。何一つ気付かず、御心残りでございますましたでしょう。それから、先日の速達でさぞかしびっくりなさったかと思えます。が何卒御安心下さいませ。もう昨日からは一人も床を引い

ている者なく、一人のこらず元気になりましたのです。やはり水にあたって下痢したという程度で、何も私のやったように大げさはいらなかつたのでした。でもあの時は心配で々々つい驚かせ申し上げました。が、何でもかくさずにこれからも力になって頂きたく存じます。……

合田静子様

一九・九・二五 沼尻麻紗子

「ハガキ 一、二」

御父兄の皆様 長々と御無音に打過ぎまして申し訳ございません。皆様からのおたより有難く拝見致して居ります。周囲に山を頂き、果物・野菜に恵まれたこの桑折の土地に、子供達も一日一日と馴れて落ち着いて参りました。一時は、飲水が変ったせいか、下痢の一週間続いた子供もございましたが、それも二、三日前から皆よくなつて元気でおります。座学もおわり、今日から又学校へ勉強に参りますのに、一人の欠席もございません。からりと晴れ渡った秋空に、真赤な赤トンボがすいすいと……それを追ってはしやぐ子供達の笑顔も明るく……元気な子供達の様子をみていますと、私共までがうれしくなります。こちらへ参りましてから早や二十五日が過ぎますのに何一つ出来ませず、毎日毎日、をただ追いたてられるように暮らしております。「十月にはお父様、お母様こられる」と、子供達は、唯一の楽しみに指折りかぞえてお待ちしております。何の為に疎開したのか。時々、考え直してみても弱い心に鞭打つて励ましております。始めは、とかくめそめそしがちでしたが、だんだんと落付いてくる中に、元気をとりもどし、全体的に落付きまして、快活に

なりました。中にばかりひきこもっても気分転換ができませんので、往復約一時間の阿武隈川に遊んだり、お寺の和尚様に御案内頂きまして、裏の畠道をずっと一回り致したり、町長さんの別荘(曾つてはお花見、春秋のながめ美しい庭園)につれて行って頂きましたり、子供達はさぞかし喜びましているでしょう。

婦人会の方々が、今日もやつと手に入れたお林檎をもつていらして下さいました。お寺の方始め、町の方々が、私共いろいろなと援助して下さいますので、随分たすかります。お父様やお母様、又、お友達のおたよりの待ち遠しいこと・・・。遠くに郵便やさんがみえますと、もう、こつちへ来るのが待てないのでございます。戦地にいられる兵隊さんの、なぐさめも、始めて幼いながら感づいて参りましたのでしよう。東京は氷川様のお祭りに大賑わいの御様子でしたが、こちらもお稲荷様のお祭りの時は和尚様につれて行って頂いて、お祭り気分にはひたりました。

子供ながら、がまん強いなーと感心する位、不自由をこらへて、我儘もおさえて、お互いに生活しているのをみまして、涙が出るようなこともあります。何もかも勝ち抜くため、涙もみせず頑張りましょう。では皆様お健やかに。

一九・九・二五 沼尻麻紗子
五年三組父兄の皆様

〔封書〕

・・・子供達、この集団生活に、とても馴れて参りましたことが、一つ一つ動作機敏となりましたことにも、おふとん部屋が、各自で製頓出来るようになりましたことにも何か、自分達で楽しみ

を見付けては遊んでいることにも、炊事もおぼさん達と仲良くお食事の用意して居りますことにも感じて居ります。始めの頃、泣いて泣いてどうにもならなかった子供達のあとかたもなく二、三日前から、裏の方で、真赤になった柿を腕の中いっぱい拾ってきては、鬼の首でもとったように喜ぶ笑顔にかわってきました。お父様お母様のお膝を離れても、ぐんぐんと育っていく子供達の笑顔をみて、私のお仕事の大きなことや責任の重いことが、ひしひしと思われてなりません。責任という言葉がどうもはつきりわかりませんでした。これが、近頃やつと、はつきりして参りました。これが責任ということなのだなーと今頃になってわかってきたのです。

お家からお送り下さいました、毛糸と編棒たのしそに動かしては、幼いながらソックスをつくり上げる日を心待ちしているのです。足袋のコハゼ、こんな風につけられましたといつてとんでくる子供、あまり上手なのでびっくりしてしまいました。工作の時間、お裁縫の時間には、今までに見られなかった緊張した空気がございます。一日一日と寒くなる冬の仕度を、自分の手でしようとのいき込みなのです。本当に何かかわいくてたまらなくなることがあります。今の苦しみがだんだん楽しみとかわって、東京に帰る頃には、お別れがかへつてつらくないのでないかしらともうそんなことまでが、心配になりました。

一九・一〇・四 沼尻麻紗子
合田静子様

〔封書〕

・・・くわしいこと申し上げますと御心配にな

られると思つてひかえておりましたが、実は、食料事情が最も心配の種となつて居るのです。設備などの点ではある程度まで我慢出来ずとしても、食物だけは栄養上とても心配でございます。なんとかならないものか、と武田先生も積極的に思案して下さいますのに、今のところまだまだなので。一番お弁当のお菜がみじめと思ひます。例えば、今日も昨日も梅干一つとフリカケ少々だけです。たくあん三、四切れだけ、又は、きうりの漬物のみということばかりで、普通の煮物とか、つくだにか、お菜がつきません。その補給が晩にでもあればよろしいのですが、晩も朝もそれどころではありません。出来ない買出しもどんどんと無理にやつて、どうにかしなければ大へん、武田先生といつも話して実行中でございます。どんな無理も押切つて断然近い中によくなりますから何卒御安心なさつて下さいませ。けれど、お弁当のお菜などに、何か適当なものがございましたら、本当に嬉しく思いますけれど。

今望んでおりますもの、遠慮なく申し上げます、懐中電灯(今日のとうな暴風雨の時よく終始停電致します。子供達何も出来ませぬ)二つ、三つ、出来るなら六〇ワットの電球を二つでも三つでも。四〇ワットでは勉強しますのに眼が心配です。食用油の不足がおびたしいのです。配給になるまで少しでもあつたらと思ひます。お一人一さじずつでもお願いします。お砂糖も一さじでも子供達にたまにはお八ツの時紅茶でもと思つておりますが・・・

一九・一〇・七 沼尻麻紗子
五女父母会の皆様

「ハガキ」

昨日降った雨もやんで、今日はとてもいいお天気です。この頃は、とても御飯が多くて、あますくらいです。おかづは、おこうこやお魚などがたくさんあります。おべんとうのおかずは、いなごのつくだにの時がありました。バターなども時々いただきます。おやつには、サツマイモやお豆やあめや、武田先生が、あせみずたらして作って下さったおまんじゅうなどを、たくさんいただきます。お家でいた時よりも、何だかいっぱいいただきます。いるようです。

沼尻先生と私達で、時々常会を開きます。そうして、自分の思っていることなどを、みんなお話をします。私達は、その常会が何より一番好きです。先生の心と、私達の心とが一つにあっているのです。今度の日曜日には、半田村へ遊びに行つて下さいませ。先生は、私達のお母様であり、先生であります。これからは、うれしいことがいっぱいありますから、それをたのしみにしていきます。

これからこちらのようすをちよいちよにお知らせいたしますから、たのしみに、待っていて下さい。では、お体を御大切に、さようなら

お母様へ
一九・一〇・三一 翠より

疎開学童の一週間の食事献立

- ・ 十月一日 (日)
- 朝 味噌汁 (じゃがいも)、香物 (胡瓜漬)
- 昼 味噌汁 (じゃがいも)、香物 (大根葉漬)
- 夕 味噌汁 (大根葉)、じゃがいも煮付、香物 (大根葉)

漬

おやつ じゃがいもの塩ゆで

・ 十月二日 (月)

朝 味噌汁 (じゃがいも・大根葉) 香物 (大根葉漬)、
ふりかけ (大豆、ゴマ塩の混合)

昼 香物 (胡瓜漬)

夜 味噌汁 (じゃがいも) 香物 (大根葉漬)

おやつ ゆで枝豆

・ 十月三日 (火)

朝 味噌汁 (じゃがいも・大根葉)、香物 (大根葉漬)

昼 弁当 (ふりかけ、梅干一ケ)

夕 味噌汁 (大根葉・カボチャ)

おやつ じゃがいもの塩ゆで

・ 十月四日 (水)

朝 味噌汁 (じゃがいも・大根葉) 香物 (大根葉漬)

昼 弁当 (ふりかけ、糸昆布煮付)

夕 じゃがいもご飯、味噌汁 (じゃがいも・大根葉)

・ 十月五日 (木)

朝 味噌汁 (大根葉)、香物 (蕪葉)

昼 じゃがいも煮付

夕 南瓜ご飯、味噌汁 (大根葉) 香物 (大根葉漬)

おやつ じゃがいもの塩ゆで

・ 十月六日 (金)

朝 味噌汁 (大根葉)、香物 (大根葉漬)

昼 弁当 (ふりかけ、梅干一ケ)

夕 すいとん (大根葉、ねぎ)

おやつ 蒸しパン (カボチャあん、小麦粉)

・ 十月七日 (土)

朝 味噌汁 (大根葉)、香物 (小蕪)

昼 弁当 (ふりかけ、糸昆布煮付)

夕 じゃがいもご飯、味噌汁 (大根葉、香物 (小蕪))

「封書」

五女父兄の皆様

帰京の節にはお忙しい中をあの様に盛大な歓迎会をして下さいまして有難うございました。何をお話ししようかと、内心心配しつつのぞみましたのに、皆様のあまりにも、とけ合ったなごやかな空気に打たれて何も申し上げませんでした。が・・・。

お母様方のお話を例の常会であの晩子供達にしました。子供達も本当に喜んでくれました。近頃、子供達はすっかり元気で朗らかになってくれました。二十八日の七人の方の面会が楽しみでございます。この頃一日おきに遠い山の奥から薪を運んで参ります。とつてもつらいですが、不平ももん句も言はずに、皆仲よく運びます。今日もさつきかへつて今、お弁当をいただいた所です。気分がすぐれない子供、頭のいたい子など、五、六人は途中落伍するのかわいそうでお寺にのこつて、自習などしています。今のところやはり病人はおりません。

私の帰りました次の日の寒いことにはびっくり致しました。今にもおちそうな暗い空で風はピュー。ピュー吹きまくり、遠く磐梯山には、白く雪を頂き頭が痛くなるほどの寒さでしたが。子供達至つて元気。頬を真赤にしてはしゃぎ廻っておりません。こんな寒さでも本当に一人の風邪引きの子も出ないので、不思議な程です。お父様お母様のおそばを離れ自分の体を自分で守る、ということを知らず知らずの中に行つて居るのでしょうか。

二十八日の面会の時、お母様方に是非もつて来て頂きたいもの。

一、ボロぎれ。布を織りませて作った丈夫な草履が十四足出来て参りましたが、あとだめだそうです。ボロ布があればいくらでも、そして、安く願出来るそうです。

一、フィルム。もしお手に入る方があるならば、写真のフィルムをお願いします。山から薪を背負って歌をうたいながらおりてくる所等、お母様方には是非見せたい場面の数々があります。

一九・十一・十 沼尻麻紗子
五女御父兄の皆様

〔封書〕

・・・汗を沢山流して、息をきらせながら、「限りある身の力ためさん」の歌口ずさみながら山に登り薪を背負ってくるそのつらい中にも、ふつと楽しみはあるものです。脚下にじつと動かない阿武隈川、大きくうねって光って居ります。田んぼには刈った稲がつかさねてまるで絵のようです。フウフウと息をきらせ、夢中で前の子供達についていく時も、時々ふりかへっては下の景色をながめます。自分で自分をなぐさめながらこうしてやっついていかないと、とてもつらいお仕事です。何かをみつけてその日その日を送っております。でも時々自分は幸福だと思います。

合田様、東京で、本当にいいお話をうかがいました。二ヶ月の悩みを精算して下さった様な気がいたします。自分でもわかるように再び桑折にかえりますと、性格が変わってしまいました。とにかく、つまらないことに気を病むことがこの数日ないので。

合田静子様

〔封書〕

吾妻山おろしの風が強くつめたく外を歩きますのに骨が折れます。

突然又お話ししたくなりましたので、書かせていただきます。

先程佐藤さんのお父様よりおたよりがありました。

予想通りでしたが、あまり、佐藤様のお父様お母様のお気持がわかり過ぎていて、随分苦しみました。霜やけのこと心配しておいでですが。合田さんならわかって下さいますかしら。私とても苦しくて又、悩まされてしまいます。東京での私の態度が殆んど影響しているのですが、いくら考え直してもああするより他致し方なかったのです。

もう何もいいますまい。合田さんにお会いしてお話したく思います。世の中には随分いろいろの方がいるものですね。そして人の気持ってなかなかデリケートなものです。殆んどが苦しみで、楽しいことは瞬間ですね。その瞬間をつかまえたと思つた時にはもう過ぎてしまつていますもの。悲しくはかなく思います。人間て何しにこの世に生まれてきたのでしょうか。

今日、風邪気味も手伝って、山へ薪運びは、途中から子供達におくれ、一人とぼとぼ登っていきましました。いき苦しくて、とうとう腰をおろしますと、何だか知らず涙が流れて・・・。たれもない山で泣いてしまつたとさつぱりしてしまいました。

寒国の秋の紅葉は格別の美しさですが、今日はまじまじと樹々を見ることが出来ました。大きな自然に身近く接すると、ちっぽけな人間の悩みなんかけしとんでしまいますね。ただ一人桑折へきて悩みも大きいですけどそれをなぐさめてくれる自然もそれはそれは大きいです。

ピアノを弾いて、山を眺めて、小さな気苦労は致しますまい。

勝手なことを書きつらねましてお許し下さいませ。

では又お会い出来ます日を楽しみに。御機嫌よう。さようなら

一九・十一・二二 夜 沼尻麻紗子

合田静子様

〔ハガキ〕

皆様がかがでいらしゃいますかお伺い申上ます。沢山の敵機、爆弾の炸裂の音は生れて始めての御体験でしょう。まだお話はあまりききませんけれど、想像に心がいっぱいです。同じ日本の中にこんなところもあるかしたと思うほど、のどかな桑折の地に、こうしているなんて・・・かへって東京で爆弾の洗礼を受けた方がこんな心配するよりましのような気がしてなりません。子供達はこののどかな空気にすっかりなじんで、さわがないのが何よりです。報道の言葉そのままただただ何も申しません。今日は日曜、子供達は鼻緒をつくって、上げております。ではお元気で。

一九・十一・二六 沼尻麻紗子
合田静子様

十二月一日現在、身体検査の状況を御知らせ申上げます。この度より体重のみ、表によってお知らせすることに致しました。方眼紙に十一月のも書直しました。この上に、来年からはずっと書き添えて参ります。

○今月のをみますと、十一月よりぐつとふえております。

集団の生活もやつとなれて、体の調子がグツとよくなりました。

皆様お喜び下さいませ。

(身体検査表は略す)

五女父兄の皆様 大安寺学寮 沼尻麻紗子

「ハガキ」

お母様お変わりご座居ませんか。私は、合い変らず元気でびんぴんしております。御安心下さい。今日は、日曜日なのでおせんたくを致しました。シャツや靴下、たび、風呂敷、パンツなどいっぱい洗いました。おせんたくもなれました。お湯で洗うので、手がつめたくなくて、いいです。こちらでは、度々空しゅうがあつて、たいへんでしょう。ですけども、お母様方は決して怪我をしたりしないですよ、私が毎日ほとけ様におまいりして居ます。こちらにいらしたら、きつと、東京へ帰りたくないと思います。こちらは、とてもしずかでいいですよ。阿武隈川で、私たちのえい画を写しました。今度そちらで写しますよ。私は、うんと大きく写ったと思います。近頃は、新米です。とてもおいしいですよ。おやつにホットケーキ

たいなのに、おさとうをつけてたべましたよ。よだれをたらさないでね。

・・・

お母様へ 一九・一一・三三 翠より

「ハガキ」

毎日毎日つづけて細かい雪が降り、野山は美しい雪景色でございます。その後お健やかにお過ごしのことと存じます。お正月をひかえて、敵の神経戦には益々はげしいものがあり、帝都の皆様には、日夜並々ならぬ御奮闘の御事とお察し致します。・・・暖房設備の方、先程から大工さんがきて、今日中に全部完了致します。子供達は、二、三日して、私と共に全部床上げ、今は雪が積つても頗る元気で暮らしております。今日はお餅つきで、午前中から、お台所の方からペツタンペツタンという音がきこえております。私も始めてお餅つきをみました。・・・

合田静子様 一九・一二・三〇 沼尻麻紗子

「ハガキ」

明けましておめでとうございます。

大安寺の私共一同一人の病人もなくこぞって元気よく新年をお迎えすることが出来ました。少年団からのお年玉は昨日夕刻お受取致しまして、本堂の電灯の下で早速に皆して開けてみました。ノートも、数々のおもちゃも大喜びでじつとしていられませんでした。お正月とはいってもモンペを

ぬぐことの出来ない東京のお家の方々を遥かにおしのび申し上げて、本年も直一層子供達をお守申上たく存じております。かしこ

合田静子様 二〇・一・一 沼尻麻紗子

「ハガキ」

お母様、お変わりご居ませんか。私はとても元気です。大安寺にいる人はみんなほがらかで元気です。・・・

お通信簿をごらんになりましたか。この間から作っていた、たびはもう出来ました。今度、又作りますから、底のきれを送って下さい。この次はお母様のを作ってあげます。

水戸の通信学校から兵隊さんが訓練しにいらっしやつたので、私達は仲よくなつてしまいました。こうして大安寺に遊びに来て下さいました。昨日お帰りになりました。お人形を作つてあげました。そうして駅までお送りしました。その時は、お母様とわかるみたいにつまらなかつたでした。そうして、今日、兵隊さんにお手紙を書きました。・・・

お母様へ 二〇・一・三一 翠より

「封書」

ここ四日ばかりこちらはひどい吹雪がつづきまして、積もった雪もとけず、今日はどこも真白な美しい雪景色でございます。朝七時起床、お炬燵にすぐ炭と火種を入れ、真赤におこると皆でヤグ

ラお蒲団をかけます。その間に、朝礼、ごん行をすまします。少しあたって朝食後登校。足に霜焼など出来てゆつくり歩く子供はあとから参ります。薪のストーブをたく先発隊も寒い雪中を颯爽と出ていきます。学校はストーブを赤々とたいて、本当にあたたかいです。やつと、二学期終り頃より身体的にも勉強に身が入る様になりました。二学期一般に低下した成績もとりのもと、いき込んでおります。お風呂には(銭湯)いろいろの都合があつて入れませんので、一昨日雪中行軍で飯坂に参りました。吹雪の進軍です。お風呂に久しぶりに思ふ存分つかつてきましたけれど、雪の中二里もよくまあ歩いてきたものと、お寺へかえった時は、溜息がつかしました。皆早く休みました。夜は今のところ座学しておりません。ともかくこの寒さですので、あまり勉強々々つめこんで体をこわしてはと、心配でお手やわらかにしております。もう少し寒さもゆるみましたなら、どんどんと能率あげたく存じて居ります。

お炬燵の中で、セーター、チョッキ、カバーなど手まめに編んでいるのが、近ごろの遊びとなっております。・・・

二〇・二・六 沼尻麻紗子

五女母の会皆様

「ハガキ 速達」

前略ごめん下さい。女兒服配給の件について申し上げます。(二月分母の会費、まだ受取りませんが如何致しましたでしょうか)三月十日までに購入する様との女兒服七着分の購入票を配給されました。(夏・冬はつきりしません)

女兒学童服参号(五円八十銭)四着、四号(五円五十五銭)三着で(衣料切符ヲ必要トス)とあります。早速買いたく存じますが、衣料切符(全員こちらにあります)を切らねばなりませんので、クジ引きでもして、購入者定めて下さい。この前の雨合羽と重ならぬ様に、又、よい案がありましたらどうでも結構ですから。八日頃までに七人きめてお知らせ下さい。右取りあえず要用のみにて失礼致します。かしこ

合田静子様

二十・三・三 沼尻麻紗子

「封書」

・・・

最後に悲しいお知らせ申し上げます。

合田さんだけにお話することですし、私にまだはつきり決定といわはれたことではございませんが、昨日、東京から帰られた海老名先生がおっしゃっておられました(他の方にはだまつて下さい。公になるまで)私疎開地はやめて、東京へかえります。女の先生では学寮長は無理だからというので、男の先生方だけで、おやりになることになりました。それで大安寺も男の先生がいらつしやいます。三年生から、三年間、他のクラスはちつとも知らず、卒業してからはこのクラスのみでしたが、いよいよあと二十日あまりでお別れと思えます、感慨無量なものがあります。教科のみならまだよかったです、衣食住すべての生活を共にして、あまりにも力のなかつた自分を持た悲しく思うのみです。私は去つても、力ある男の先生がいらつしやつたら、それだけ子供達は

幸福になるのですもの、私は以前からそう思っていました。そう思いましたら悲しいなどは少しも申しておりません。九月から共に苦しみ共に喜び、言葉の通り苦楽を共にした子供達でした。一生の思い出となることでしょう。

・・・

合田静子様

二〇・三・三 沼尻麻紗子

「封書」

ヒューヒューと、外はものすごい大風です。お昼頃から急に風が出て来ました。障子はずれたりして、とても大変です。東京はどうですか。今日も又、空襲がありましたかしら。

森先生はお家へ行らつしやいましたか。昨日こちらをお立ちになる前、先生のお部屋でいろいろとお話をしました。私が北海道へ行くか行かないかと言うことです。一時は、とても皆んなにいじめられて、こんなところにはいたくないと思つたことがあります。そういふ時は、とてもお母様の所にいたくなります。でも、近頃、急にたのしくなつたりすることがあります。先生のお部屋で、沼尻先生とお話をしたりすると、沼尻先生がほんとうのお姉様の様に思えていつしよにねたくなります。それから、仲のよいお友達が出来ると、そういう人達とはなれて北海道へ行くのが、いやになります。明日は、四月一日ですけれども、私達は座学です。午前中に班ごと近くのたんぼのどぶ川みたいな所へ、せりを取りに行きます。この前のように明日も一ぱい取つて来ようと思ひます。初めのうちは、蛙がいると、飛びあがってしまいま

したが、もう今はなれて、平気で、はだしで中へ入れます。これからは、もつともつといろいろなことがあります。もち草を取りに行ったり、阿武隈川へお魚を取りに行ったりすることが、たびたびあります。でも、とてもつらい冬をとおりこして来ましたから、とても体は丈夫です。雪の中を学校へ行ったり、おそうじをしたり、いろいろなことをしました。それだけ私はえらくなくなっています。今度お母様と暮らす時には、うんとお手伝してあげますよ。この頃はぞうきんがけをしたりすると、かえって気持ちがいいです。私は今日から食事当番です。朝は、おそうじをしないで、顔を洗って、すぐお食事の方へ行きます。

さつきは、先生と皆んなでお唱歌を歌いました。とても心が明るくなったような気がします。もつともつと声のかれるまで歌いたいです。

今、先生のお部屋で沼尻先生といっしょにお手紙を書いています。静かな所にいると、お家にいるような気がします。たんすの上に、阿武隈川から取って来たねこやなぎが、ガラスの花びんに入って、あがっています。

今日は、もうおそいですから、これで終わりにします。

お体を御大切に

さようなら

二〇・三・三二 翠より

お母様へ

付記

ここに掲載した手紙類は、父の遺品の中にあつたものである。亡き父母がそうであったように、

私も届いた手紙類のほとんどを今も保管している。メールや携帯電話でやりとりする現代にあつて、今後おそらくこうした庶民の精神世界を後世に残すことはまずあるまい。文明栄えて文化滅びるといったところであろう。

因みに沼尻麻紗子先生は、後年姉が調布のお宅にお訪ねして知ったのだが、疎開先で知り合った男の先生と戦後すぐに結婚したものの心の荒んだ夫の暴力に耐えられず離婚、さびしい独り暮らしをしていたという。その後どうされていることか・・・

なお、母・静子は昭和三十三年に五十二歳で、また姉・翠は昭和六十四年、五十六歳で他界している。

《編集後記》

ふるさと「風」も無事に十周年を迎える事が出来た。当会報の自慢できることは十周年の継続ではなく、会員の一度も休まず、十年120号を書き続けたことだろう。創刊号からの会員は四名。現在は倍の八名。毎月投稿頂ける方が二名。その他不定期ではあるけれど美浦村の陸平をヨイショする会の方から投稿を頂いている。

毎月の発行部数は550部であるが、この小さな市の一有志たちの会であれば、この部数は妥当であろうと思う。

当会の姉弟である「劇団ことば座」も今年十周年を迎える。その大きな後ろ盾になってもらったのが、八郷の丘に建つギター文化館であった。「常世の国の恋物語百」の発信基地として受け入れてもらったことは感謝に堪えない。

また、当風の会の作品（ふるさと風の文庫）の展示販売も引き受けて頂いていることは、会員の大きな励みにもなっている。改めて、謝意を申し上げます。

十周年を前にして、この編集者の年齢の半分に満たない会員が出来た。しかもこの地に生まれ育ち、石岡一高の卒業でもあるという。一つの節目に若き会員が出来たことは、この会報の歩む道はまだ先があるということだろう。

編集事務局

〒315-0001

石岡市石岡13979-2

☎0299-24-2063

(白井啓治方)

<http://www.furusato-kaze.com/>



(兼平智恵子・常世の国の五百相より)

ふるさと風の会会員募集中!!

ふるさと風の会は、「ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える」を基本軸として、自分の思いや考えを言葉に表現していこうと集まった者達の会です。

自分達の住む国の暮らしと文化について真面目に考え、その思いを言葉に表現することで希望の風を吹かせたいと考える方々の入会をお待ちしております。

会の集まりは、月初めに会報作りを兼ねた懇親会と月末に雑談：勉強会を行っております。

○会費は月額 2,000 円。(会報印刷等の諸経費)

※入会に関するお問い合わせは下記会員まで。

白井 啓治 0299-24-2063 打田 昇三 0299-22-4400

兼平智恵子 0299-26-7178 伊東 弓子 0299-26-1659

風の言葉絵同好会参加者募集

全てが自由で自在であれ、のふるさと風の会から生まれた、兼平智恵子の風の言葉絵。

この新しい自分表現の「風の言葉絵」を楽しむサークルでは、一緒に言葉と絵を楽しむ参加者を募集しています。

詳しくは、兼平智恵子(☎ 0299-26-7178)へお問い合わせください。

ふるさと風の会 <http://www.furusato-kaze.com/>

「ことば座団員」&「朗読教室生徒」募集!!

劇団員の募集

ことば座は、霞ヶ浦を中心とした「ふる里物語」を朗読手話舞と朗読劇に表現する劇団です。

ことば座では、スタッフ部門・俳優部門の団員を募集しています。

ふる里劇団に興味をお持ちの方の連絡をお待ちしています。

朗読教室生の募集

朗読とは、物語を読み聞かせるのではなく、声に劇しく(はげしく)心を演じることを言います。物語や詩を朗読に表現する時は、言葉に紡がれた作者の心の真実をうけて、表現者として劇しく(はげしく)そのドラマ(物語)を演じることが必要です。

何かで自分表現をしたいと考えておられる方、朗読による自分表現を考えてみませんか。演劇表現としての朗読の基礎を学び、朗読で自分表現を、また朗読で「ふる里の歴史・文化」をつたえて行きたいとの思いのある方、連絡をお待ちしております。

月1回コース(受講料:¥6000円) 2回コース(受講料:¥9000円)

連絡先 080-3125-1307(白井)